グリゴーリー・ユージン「この戦争はロシアの歴史上、最も無意味な戦争になるだろう」(2022 年 2 月 23 日)

（和訳：平田拓海 早稲田大学政治経済学部 4 年）

Григорий Юдин. Эта война будет самой бессмысленной из всех войн в нашей истории // Open Democracy, 23 февраля 2022.
https://www.opendemocracy.net/ru/voyna-rossii-protiv-nezavisimosti-ukrainy-lyuboy-tsenoy/

社会学者のグリゴーリー・ユージン：なぜ今日のプーチンの行動が、ウクライナの独立に対するあらゆる代償を厭わない戦争であるのかについて。

まもなく大きな戦争が始まる。私の世代の、おそらくはその前の世代の時代にも起きなかったような戦争が。ロシアはウクライナとの国境に、保有する軍事力全体の 60～70%に及ぶ巨大な軍隊を集結させた。ベラルーシは公式的には、自国からロシア軍が撤退することはないと表明した。ウクライナからほんの数キロの、森に、そして草原に、戦車が待機している。ベルゴロド、クルスク、ブリャンスク、ホメリの各州で撮影された数多くの映像で、その様子を見ることができる。軍団は大規模な作戦に向けた準備を万端にし、そのためには全てが整っている。軍団はすでに、攻撃への最後の一歩を踏み出したのだ。

この戦争を止めうる唯一のことは、ウクライナがプーチンの手に渡ることだ。ミュンヘンでのゼレンスキーの力強い演説から判断するに、彼はその可能性を排除していない[1]。しかしもしそうならなければ、戦争が始まる。他に選択肢はない。

ルガンスク人民共和国とドネツク人民共和国の現在の支配領域の併合[2]だけで、事は収まらないだろう。それは軍事アナリストも認めていて、ロシア軍は他の方面に集中しており、ロストフ州では比較的控えめだと指摘されている。ハリコフ、キエフ、オデーサ[3]は直接攻撃に晒される。それは政治的な理由からも明らかだ。併合はミンスク合意からの離脱を意味し、そして両人民共和国は単に、ウクライナが自らの最終的な独立のために支払う代償となる。まさにその独立をこそ、プーチンは許さないのだ。

ドイツのショルツ首相が「なぜ議題にすらなっていない問題（ウクライナの NATO 加盟問題）から危機が生じるのか理解できない」と言う時、彼は猫をかぶっている。プーチンが何度も繰り返して

---

[1] アメリカがプーチンの侵攻決断をめぐる「確信」を表明した翌日、ゼレンスキーは危険を冒してまでミュンヘンでの安全保障会議に出席した（2 月 19 日）。ここでは、「ゼレンスキーはウクライナが本当にプーチンの手に渡ってしまう可能性まで想定していた」ということであろう（以下、脚注は翻訳者による）。

[2] ロシア連邦は両人民共和国の独立を承認したものの、法的な併合は現在も行っていない（本稿はあくまで全面侵攻開始の前日に発表されたものであることを想起されたい）。

[3] 本稿はロシア語で執筆された論稿の翻訳であるため、ロシア語に基づいた表記を用いる。

きた重要な言葉、それは「今」だ。ウクライナの運命をめぐる問題は今すぐに解決されねばならず、そこで問題となるのは、決して形式的な NATO 加盟ではない。ウクライナは、ヨーロッパ式の政治制度を構築しうるのに十分な軍事的保障を享受するか、あるいは、そのような安全保障を受けられず即座にプーチンの管理下に置かれるかだ。ウクライナが、NATO 抜きでヨーロッパ諸国やアメリカ・カナダとの軍事協力を進めつつ、すでに前者の道を進んでいる以上、短期間でウクライナを止めることはもはや不可能だろう。ウクライナは去っていき、それを止めるには今しかない。様々な対内的・対外的理由から、今こそが最良のタイミングであり、それ以降は時すでに遅しなのだ。2022 年に、プーチンはウクライナに対する支配を取り戻さねばならない。何としても。できるだけ代償は小さい方がいいだろうが、あらゆる代償が想定の範囲内だ。

いかなる制裁もプーチンを止めはしない。たしかに制裁は望ましくないし、いくつかの国が弱点を露呈し、制裁から離脱することをプーチンは確実に望んでいる。というのも、ひとたび戦争が始まれば、制裁を課すインセンティヴは実際には急激に下がっていくだろうから。とはいえ、プーチンは再び「いずれにせよ制裁はやってくる」と繰り返し、それはつまり、遂行中の計画はあらゆる最悪の可能性を考慮に入れているということだ。プーチンにウクライナを諦めさせうるような制裁は存在しない。それに、そうした制裁のかなりの部分が、いかなる攻撃がなくとも、必然的にすでに現実味を帯びている。プーチンがヨーロッパに振り上げた拳は、何らの制裁なしでも、基本的な安全保障のためにロシアとの貿易を大幅に縮小させるには十分すぎるものだ。

これらは全て、世界中の様々な地域の多くの人々にとって試練となるだろう。同様に、私たちロシア人にとっても。

言うまでもなく、NATO はロシアに対する潜在的な軍事的対抗者である。それはソ連に対してつくられた軍事機構であり、ソ連とワルシャワ条約機構の解体後も、解消されるか改組されることはなかった。それは平和的でも、また無垢でもない機構であり、「防衛的同盟」の概念の範疇には入りえないような人道的作戦[4]を遂行してきた。無論、ロシア国境への NATO 不拡大の提案はソ連・ロシアの指導部に対して行われてきたうえ、それに関しては文献上の証拠も十分に存在する。この提案は採択されず、約束にもならず、どこにも明記されなかったし、従っていかなる義務も生じさせなかった。しかしながら、その提案の取り下げが意味するのは、1980〜90 年代にかけてにあったロシアの平和的な志向を悪用し、ロシアの軍事力を弱めようとする願望そのものだ。このような条件下での NATO の拡大は、ロシアに対する非友好的な行動である。NATO の東方拡大はロシアにとって不利であり、ロシアの責任あるいかなる政府もそれを妨害しなければならない。

NATO 拡大の妨害という課題を、プーチンは台無しにした。彼の任期中に NATO は 1.5 倍[5]になり、4 度にわたって拡大し、その構成国として新たに 11 もの国が加盟した。問題は、プーチンがただ一つの道具しか信じていないことだ。それは暴虐な軍事力であり、彼はそれにのみ支えられている。NATO 加盟の阻止を達成するには力によって強引に押しつけ、強制するしかないと考え、彼は今もなお攻撃的に行動し続けている。そのおかげで、以前よりもはるかに多くの国が NATO への加盟を望んでおり、ロシアの立場は悪化している。スウェーデンの NATO 加盟が来るべき戦争の結果となるだろうし、フィンランドの世論も同様に変化した。プーチン政権下のロシアはヨーロッパの国々

---

[4] コソヴォ紛争時のベオグラードとカダフィ政権下のリビアへの空爆を指すと考えられる。

[5] 加盟国数を基準にした数字であろう（2000 年 5 月時点 19 カ国→現在 30 カ国）。

に対し、NATO のメンバーシップが魅力的でなくなるような提案を何もできなかった。それどころか、ロシアからの攻撃の現実的な危険によって NATO は再び意味を見出し、ヨーロッパの人々にとって、その強化が発展の基本的な選択肢と見なされるようになった。プーチン時代に、NATO ブロックはかつてなく強力になったのだ。

それに関して、声を上げる勇気のあるロシアの将軍たちは、NATO がロシアに対していかなる差し迫った脅威も与えていないことを、正直に認めている。NATO は潜在的な敵対者ではあるが、NATO 側からの攻撃は、ロシアにとって優先順位の低い挑戦だ。世界的なエネルギー転換の結果、私たちはエネルギー輸出の収入を本当に失うかもしれない。極めて重要なテクノロジーを、私たちは外国製に完全に依存するようになるかもしれない。文化センターとしての、科学国家としての、人間が成長を遂げる場としての魅力を、私たちは本当に失うかもしれない。文化的・イデオロギー的なヘゲモニーといったものを、私たちは本当に失うかもしれない。おそらく、私たちは中国への耐えがたい依存に陥ることになるだろう。とはいえ、ロシアが NATO ブロックによって併呑されることはありえない。それはカダフィの運命を分かち合うことを恐れるプーチンの、個人的な恐怖である。プーチンは、あらゆる犠牲を払っても蜂起を抑えられなくなることを恐れているのだ。

ロシアの利害は、プーチンの利害と矛盾している。そしてそれゆえに、プーチンは自身の利害に基づいて行動している。NATO を強化させ、ロシアとの国境近くまで押しやり、ロシアが抜け出し難い窮地をつくりあげたのだから。

ロシアは脱政治化された国であり、人々は政治にほとんど興味を持っていない。特に外交には。ロシアの人々は来るべき戦争を信じたくないだろうし、戦争の開始は完全に予想外な驚きとなるだろう。特にそれが、感情を強く刺激するニュース映像を伴う場合には。ロシア政府の公式見解は、ほとんど疑いなしに受け入れられるはずだ。第一に、戦争とはいかなる国においても団結の時であり、人々は本能的に結束しようとするからだ。第二に、政府見解の代わりになりうるような信条はアクセスし難い状況にあり、そしてこれまで人々が信じてきたものとあまりにかけ離れているからだ。第三に、自国が遂行している戦争に疑いの目を向けるのは、常に困難なことだからだ。第四に、それは単に危険であり－戦時においては批判者と裏切り者の境界が消え去り、裏切り者には容赦ないからだ。第五に、たとえ何かに疑問を抱いたとしても、何をできるのかがあまり明確ではなく、それゆえに疑いを持たない方が楽だからだ。結局のところ、「ウクライナなるものは存在しない」というプーチンの論に賛同するロシア人はそれほど多くはないが、その支持者たちはまもなく非常に声高になり、沈黙のスパイラルが彼らのために作用するようになるだろう。今日「戦争って何のことだ」と公然と述べ、そのことについて面白おかしく皮肉を言う人たちは、戦争が始まった途端に「奴らが始めなければ戦争なんてなかったんだ」という立場を取れるよう、自身や周囲の人々に用意させている。遅かれ早かれ意見の一致には裂け目が生じるだろうが、初期段階では最悪に備える方が賢明だ。

ロシアの歴史には偉大な戦争があった。私たちの国が何ものとも比べ難い英雄精神を発揮し、文字通り世界を救った時だ[6]。しかし、未来への恐怖と傲慢さ、そして愚かさから始まった、無意味で恥ずべき戦争もあった[7]。ロシアは敗北し、そこから教訓を得た。この戦争は、ロシアの歴史上のあらゆる

---

[6] ロシアでそれぞれ「祖国戦争」「大祖国戦争」と呼ばれる対ナポレオン戦争と対ナチス戦争を想定しているのであろう。

[7] 想定される戦争はいくつもあるが、クリミヤ戦争（1853-56）と日露戦争（1904-05）が最大の

戦争の中で、最も無意味な戦争となるであろう。なぜなら、私たちはウクライナ人とは決して戦ってはならないからだ。たとえ私たちの観点から見て、ウクライナ人が選択を誤り、恩知らずで、無慈悲だとしても、またそこに無責任な指導者たちがいるとしても、ウクライナ人と戦ってはならない。たとえ、あちらが完全に悪いとしても。それは、ウクライナ人だからだ。もしウクライナ人と共通の言葉を見つけることができないならば、私たちは他の誰とも親しくすることができない。私たちは全世界を相手に一人取り残され、耐えがたい敗北を喫するであろう。

事例である。